

## 第 23 回 富士山写真大賞

審査員 三宅 岳

### 総評

第 23 回となる富士山写真大賞。

富士山の魅力を活写し昇華させた作品の数々。そこから選り抜かれた傑作が本写真大賞の入賞写真である。その榮譽を称え、魅力を余すことなく伝えるべく、大きなプリントとして展示するのがこの展覧会。

本大賞にあって、元旦からの開場は恒例の習わしであり、清々しくめでたいものでもあった。しかし、突如発生したコロナ禍は、世界を社会を揺さぶり、人心にも大きな打撃となって雨あられと降り注いだ。本大賞もその波から逃れることは出来なかった。一昨年は開催延期を余儀なくされた。ようやく開催にこぎつけた昨年度は日程の変更と紆余曲折。こういった大波小波は、忘れえぬ痛手となり、本賞の歴史に刻まれた。

それだけに、『第 23 回富士山写真大賞』の展示が、2023 年の元旦早々から開催できるということは、選者という立場にあっては実に嬉しい限りである。ご来場の方には、富士山と正々堂々と向かい合った結晶を、ぜひとも目に焼き付けていただきたいと願うところである。

さて、今回の参加者について。応募総数は 976 点。応募人数 273 人。いずれも 2021 年度の第 22 回の 8 割程度である。2021 年度も応募者・応募点数がともに減少していただけに、この傾向は残念としか言いようがない。しかし、幾つもの波となって押し寄せ続けるコロナ禍という状況下において、やはり外出自粛をされている方、撮影行をためらう方も少なくはないだろう。そう考えると、これだけの作品が応募されてきたことに、選者としてあらためて御礼申し上げる次第である。

ところで、本大賞では、全国随所にみられる郷土富士の写真も応募対象だが、今回はこの応募が残念ながら激減した。全国にまたがる募集広報が少し手薄になったことも影響したかと思うが、残念なところだ。来年以降、全国自慢の郷土富士の雄姿が再びこの地に集うことを、節に期待したいところだ。

ここから各作品の講評に移る。

### 金賞「怒濤」島田穰さん撮影

雲海というものは、これほどまでに乱れ荒れるものか。

富士山と雲海といえば、まず思い描くのが「頭を雲の上に出し」という、唱歌冒頭部分である。穏やかな青空に、突き抜ける富士山。その中途まではしっかりと白い雲に隠される。これぞ富士山と雲海というイメージであり、一幅の絵として完成されているものだ。

そのイメージを、真逆さまに覆す迫力の一枚がこの「怒濤」である。誰もが見たことのない富士山の一面に、ぐっと踏み込んだ一枚。まさに「怒濤」の名にふさわしい。そこには純白で穏やかというイメージの雲海など、見事打ち砕かれ、何一つ残っていない。

幾重もの闇と光の層となり、揺らぎ湧き上がり、おもむろに沈み込む雲は、まるで台風押し寄せる荒波の大洋そのもの。そして、その恐ろしくも見えるちぎれ雲のうねりの彼方に、泰然自若のゆ

るぎのない姿を浮かび上がらせる富士の山。

動と静がみごとにまで融合し、魂を震わせる一枚といっても過言ではない。

ところで、雲海と富士山を思い描くと、その多くは山麓から見上げた富士山である。中腹から山麓にかけて白雲をまとわせる富士の穏やかなる姿。一方、稀にはあるが、現代らしい富士の景として、飛行機の窓から見下ろす雲海と富士山という景色も目にすることがある。雲の絨毯にポツカリと貌をのぞかせる富士山。

このように、見上げる視線、あるいは下方への視線で捉えられることの多い富士山と雲海。一方、この作品では、ほぼ雲海と同じ高さに撮影者の視点があるということも、見逃せないのである。撮影地は北岳。本邦第二の高峰である。

まさに雲のうねりのなかに巻き込まれながら、彼方に泰然自若の富士を据える。だからこそ生まれた、富士山と雲という役者達とほぼ同高度の目線からなる的確な配置＝構図。この作品に一層の迫力を与えるポイントである。

更に加えてみれば、現代の世情もこの作品の背中を押すものになっている。この作品からほとぼしるのは、不穏な空気である。このざわめく雲は、コロナばかりではなく、大から小まで土台の揺らぐ現代社会のメタファーにも見える。その不穏を一気に受け入れ、しかしそれには全く動じることのない、富士の山。

少々深読み過ぎるかもしれないが、忘却の彼方にあった霊山としての富士を再興させる凄みさえ伝わってくるのである。

### 銀賞「新緑に囲まれて」宮崎泰一さん撮影

心浮き立つ春の勢い、どっしりと腰を据えた富士山。相反する要素を幾つも取り込みながら、それらが見事に明るく融合した作品である。

写真の四週四辺にあふれかえるのは、まだ芽吹いたばかりと見える柔らかで明るい新緑だ。春の足音をしっかりと感じさせる勢いに満ちている。その明るさに縁取られ、ぽつかりと窓のように空いた空間には、漆黒のシルエットと化した富士山。頂きの彼方には光芒を放ち、シルエットを演出す太陽。そしてさざ波の揺らぎに、影も光もしっかり投影する湖面。この太陽と富士山、さらには湖面が生み出す光と影のドラマは、漆黒という部分が多いにも関わらず、暗い印象が全くない。

そこには、たとえ黒々としても画面を暗く沈めさせない富士山のフォルムの美しさが際立っている。画面に散りばめられた数多の要素が、このフォルムに収斂するような巧みな構図に、引き込まれてしまうのである。しっかりと被写体を見る構図に、富士山を楽しむ余裕さえ感じられるのだ。

今回の応募作では、秋を感じさせる作品が数多かったものの、不思議なことに春を愛でる作品点数はあまり多くなく、目をひかなかった。その中で群を抜く巧妙さのある作品である。

### 銅賞「厳冬の落日」上野祐司さん撮影

富士山は日本一の山である。それは標高だけの話ではない。昭和41年に観測された91m/秒という最大瞬間風速記録は今も日本一のまま。とにかく、3000mを大きく超えた独立峰なので、風が強い。その風が笠雲やレンズ雲など、富士を脚色する珍しい気象現象の根源になっている。そして、この一枚も、強風あってこそ誕生した作品なのである。

日没間際であろう、暮色に染まった斜光線が強烈な陰影をもって山を浮き彫りにする。際立つのは宝永火口の歪な穴である。荒々しい尖りを見せる山頂も、何となくプリン型をイメージする山頂の印象を大きく揺さぶるもの。中腹を強固に締めているのが、凍てつく森。そして、何よりも勢いよく、ダイナミックに変幻し躍動し舞い上がる雪煙。これだけ雪を高く舞い上がらせるのだから、おそらくは山頂では相当な強風が吹き荒れていたはずである。

上々のコンディションを逃がすことなく、しっかりと受け止めたこの一枚。とにかく迫力がある。つまり、画面に無駄な空間がほぼ無い、無駄を削ぎ落とした魅力に満ちている。

なお、撮影地の水ヶ塚公園は、標高 1450m。富士山南側裾野市の撮影ポイントとしてよく知られている場所である。そこから写された写真は何点も目にするが、この迫力は出色であった。

あとは一気に 6 点の優秀賞にふれておきたい。

#### 優秀賞「花鳥風月」加藤利忠さん撮影

朝焼けにビビッドに染まる空、それを同じ色合いで反射させる湖。天候条件を活かしきった写真であり、色合はみごとだ。近景に配置したボートと栈橋にも、しっかりと天空の色が映える。その栈橋を画富士山の傾斜と並行とするよう斜めに配置することで、画作りにも成功した。ただ、この早朝の景色は、花鳥風月とは、少々乖離していると感じる。より作品が引き立つタイトルを再考してみてはいかがだろうか。

#### 優秀賞「剣ヶ峰 26 夜月」門脇秀一さん撮影

月と富士山も、よく似合うモチーフである。作者はあえて二十六夜の月を選んだようだ。二十六夜の月は、かなり細い三日月である。その三日月が昇る刹那と富士山頂剣ヶ峰を組み合わせた、計算され尽くした作品。大望遠で引き付けるためには、予め撮影場所や時間など、計算を尽くしているはずで、それだけでも見事だ。ただ、欲を言えば、もう少し三日月型を見たい気がする。

#### 優秀賞「秋光に染まる」三輪優子さん撮影

透過光により鮮やかなカラマツ黄葉を手前に配置、遠景にはまばらに雪をちりばめた富士山。そして、その直上にある秋の陽射しのなんと眩しいことか。光芒がその引き締まるような眩しさをひととき強調している。派手さはないがしっかり無駄のない構図。近景中景遠景を配するという基本。さらに、手前から奥までしっかりとしたピント。オーソドックスな手法だが、嫌味がない写真。明るい秋を見事に写し止めた。

#### 優秀賞「星夜の乱舞」勝亦裕さん撮影

昨年も同様のことを記したが、デジタルカメラの普及で、夜の写真が容易に撮れるようになった。星と風景を絡める星景写真という言葉もすっかり市民権を得た感があり、確かに本賞にも多くの応募がある。しかし、ただ撮れただけでなく、作品に昇華してゆくものはまだまだその一部。この写真は、富士と空の占めるバランスが良く、また、吹き上げる雪煙が、富士山が孤高の峰であることを強

調する。昨年度銀賞受賞者ならではの、優れた技術と感覚が結晶した一枚だ。

#### **優秀賞「生活の中の富士」海老原勇人さん撮影**

例えば富士見台、富士見坂、富士見通り等々。日本一の高峰は遥か彼方の存在でありながら、一方で身近に点在する近しい存在でもある。この、富士山の両義性をあぶり出すようにスナップシュートした作品である。ふと見上げた風景にポンと出現する富士山。偶発的な一枚にも見えるが、事前に狙いを定めた一枚にも見える。まさに生活の中で富士山を見直すという、その視点が秀逸だ。

#### **優秀賞「凍てつくダイヤモンド」小林勝さん撮影**

昨今人気なのがダイヤモンド富士。確かに絵になる瞬間である。とはいえ、その瞬間を写すだけではすでに凡庸な一枚である。本作品では手前を比較的大きく写しているが、そこにはまるで数十本のアイスクャンディーのように、様々な氷の棒がひしめき合い輝いている。この氷を主役にするからこそ、ダイヤモンド富士が颯爽と輝きを増す。近景から遠景まで、光と構図のバランスの良さがあり、そこに素材が伴った好例だ。

以上が優秀賞までの評である。これに続く入選作 41 点は優秀賞まで僅差という作品ばかりであった。昨年も記したことだが、実に惜しいことである。

一言記すが、このあと一步の作品たちには、とても秀逸だが、どこか他の写真に似ているな、と思い起こさせる作品が少なくなかった。

是非とも自分だけの撮影場所、自分だけの構図、自分だけの富士山を探していただきたい。そういったオリジナリティーも、写真作品には大事なことなのである。